

野生鳥獣の行動および被害防除について

江口祐輔

近畿中国四国農業研究センター

鳥獣害研究チーム

1. イノシシが嫌がる環境を作る

2. 田畑を効果的に囲う

3. 適切な駆除を行う

知らずにやっていた餌づけ行為をやめよう

柵の外にあふれる イノシシのご馳走とイノシシ優待道路！
イノシシは柵の外の餌を食べて人間の作物を覚える



柵の外に伸びた枝。柵の外に落ちた実で動物は作物の味を覚える



余った種いも。野生獣に食べてくださいと言っているようなもの



ナスとキュウリが無造作に動物にとってはご馳走です



収穫を終えた苗や刈った草などを一カ所に積んであります。放置するとそこからカボチャが・・・



イノシシの通路
草を刈る、マルチで地面を覆う、家畜を放す、トタンやじゅうたんなどを敷いて草を伸ばさないなどの工夫で耕作放棄地の管理を。

この3つの対策を地域で協力しながらバランス良く行うことが重要。

田畑を囲うだけや、有害駆除をやるだけでは被害は減らない。

まず、知らないうちに行ってしまう餌づけ行為をやめて、野生獣が人間の生活域に出てくるのを難しくする。そして、効果的な囲い柵で野生獣の田畑への侵入を防ぐ。学習能力に長け、人になれてしまった個体を捕獲する。

有効な囲い方

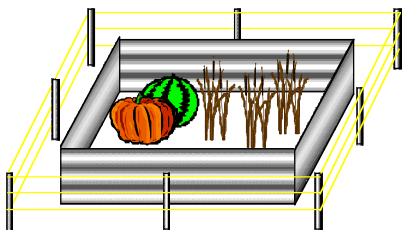
- ・ すきまを作らないこと
- ・ 作物が見えにくくすること
- ・ 金網や網の目は10cm以内のものを使う
- ・ 電気柵、イノシシの足場は舗装道路よりも土

それでも入られた！！



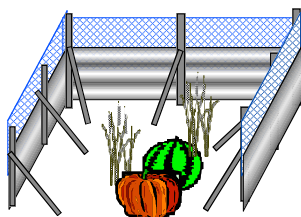
持ってるものを組み合わせて効果的な柵を作る

たとえば、



作物をトタン板で囲い、さらにその周りを電気柵で囲う

- ・ 視覚的に作物が見えにくくなる
- ・ 踏切位置がトタンから遠くなり、イノシシが飛びにくい
- ・ 電気ショックを受けたときに前方へ突進しにくい



作物をトタン板とネット等を組み合わせて囲い、さらに支柱を斜めに入れて補強する

- ・ 視覚的に作物が見えにくくなる
- ・ 踏切位置がトタンから遠くなり、イノシシが飛びにくい
- ・ 押し倒しを防止できる

イノシシに意地悪をしてやろう！

- ・ 野菜くずを放置しない！
- ・ 実った果実は収穫・落ちた果実も回収！
- ・ 作物は見えないように隠そう！
- ・ 収穫しない果樹は切ろう！
- ・ 身を隠せる茂みをなくそう！
- ・ 獣道を定着させない！



ネット、トタン、電気柵などの
囲いの効果がアップ！！

駆除の考え方

- ・ 駆除数を競うより、数は少なくてもいいから被害を起こす個体を捕まえる。
- ・ 山奥のイノシシより、田畑周辺のイノシシを狙う。

猟師数の激減・高齢化（30年間で50万人から30万人に！）

イノシシを絶滅させるのは事実上不可能。

効率の良い駆除が必要。



捕獲されたイノシシの群れ

イノシシが田畑へ侵入する方法は、障害物を押し倒す、飛び越える、くぐり抜けるなど様々です。そこで、イノシシの跳躍能力や、鼻で物を持ち上げる力を測定しました。

イノシシは1メートル以上の高さを飛び越えることができます（写真）。一歳未満の子イノシシでも、田畑を囲うのに使われているトタン板の高さ（65センチ）を飛び越えることができます。

実験により、イノシシの優れた跳躍力が明らかになりましたが、イノシシは危険にさらされた場合と違い、食べ物を得るためにわざわざ助走をつけて跳ぶことはありません。また、跳躍する際に障害物の近くで踏み切ることもしばしばありました。これらの結果はイノシシ防除のための貴重なデータとなります。

鼻の力も相当なもので、イノシシは自分の体重程度の重さであれば鼻で持ち上げられることが分かりました。実験では、雌イノシシが60キロ程度、雄イノシシは70キロ以上の重さを持ち上げることができました。

様々な障害物をイノシシに与え、その行動を観察した結果、イノシシは奥行きのある障害物や複雑な構造の障害物に対しては、高さが低くても、障害物の下をくぐり抜けることが明らかになりました。



イノシシの鼻による押し上げ力量測定

柵の中のイノシシはおもりのついたドアを開けて餌を得る



まず周囲を警戒し、



柵の高さを確認、



中の餌を確認、

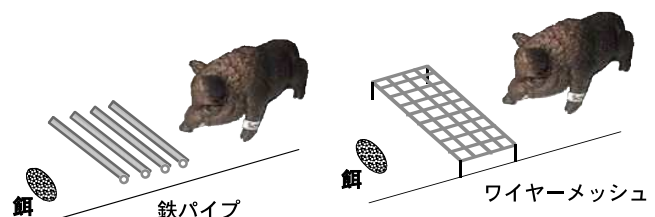


そしてジャンプ!

意外に慎重なイノシシの跳躍行動



跳躍するイノシシ



奥行きのある障害物試験

イノシシは奥行きのある障害物に対しては高さが低くてもくぐり抜けようとする傾向がある

各種の匂い物質に対するイノシシの反応

被害現場では、忌避効果のある匂い・音・光などの登場を待ち望む声が多く、これまでも木酢液・クレオソートなどの匂い、爆音器やラジオなどの音、フラッシュや松明の光など、様々な物が忌避物質として用いられてきました。時折、忌避剤の効果が報道されることもありますが、そのほとんどすべてにおいて忌避効果は一時的であり、その後、イノシシの侵入を許しているのが現状です。そこで、なぜこのようなことになるのかを調査した結果、イノシシは忌避すると考えられていた物質を嫌うのではなく、環境に変化が起きたことをイノシシが察知して警戒することが分かりました。したがって、環境の変化に慣れてしまうとイノシシは田畑に侵入します。それどころか、匂い物質などは誘因物質としてはたらいってしまうこともあります。



クレオソートを体に擦りつけるイノシシ



木酢液を舐めるイノシシ



猛獣の糞に体を擦りつけるイノシシ



忌避シートを摂食するイノシシ



忌避ペーストの上に乗るイノシシ

一般にサルは、とても頭の良い動物と認識されており、農家はサルの被害対策を最初からあきらめてしまう傾向にあります。しかし、ニホンザルは私たちが考えているほど、頭の良い動物ではありません。

イノシシは扉を鼻で持ち上げて簡単に餌を得ることができます。そこで、ニホンザルもイノシシのように扉を持ち上げて箱の中の餌をとることができるかどうかを調査しました。

まず、サルの前で実験者が箱の扉を開けて餌を食べる実演を何度も繰り返してサルの群れ(50頭)に見せましたが、まねのできたサルはいませんでした。次に写真のように餌を入れた箱の扉を開けておき、餌を取らせました。そして少しずつ扉を閉めていき、最後は自分で扉を開けるようにしましたが、やはり扉を開けたサルはいませんでした。そこで、扉をネットに変えてみたところ、サルはネットを押すばかりで、餌を得るまでに相当の時間を費やしました。



扉を少しずつ閉めていったが、自分で扉を開けるサルはいなかった



ネットを掛けただけであるが、押すばかりで餌がとれないサル

ニホンザルの垂直跳びと幅跳びの能力を測定したところ、垂直跳びでは220cmの高さまで手がとどきました。幅跳びでは助走無しで220cmが最高記録でした。サル用の防護柵から2メートル程度近くに電柱や物置があると、それらを利用して田畑内に侵入できてしまいます。



垂直跳び



幅跳び



アライグマの侵入行動



ハクビシンの通り抜け実験